

日本菌学会ニュースレター

Newsletter of the Mycological Society of Japan

2023-1 (1月)

目次

| | | | | |
|---------|--|-------|-----------------|----|
| 報 告 | : 国際・公開シンポジウム開催報告 | …………… | 廣岡裕吏・埋橋志穂美・細矢 剛 | 1 |
| 報 告 | : 2022 年度年度日本菌学会菌類観察会開催報告 | …………… | 丸山厚吉 | 3 |
| 随 想 | : Asian Mycological Congress 2021 参加報告 | …………… | | 5 |
| 随 想 | : 2022 最近参加した3つの学会で感じたこと | …………… | 佐藤大樹 | 11 |
| 書 評 | : The Hidden Kingdom of Fungi | …………… | 岡田 元 | 12 |
| 掲 示 板 | : 日本菌学会第67回大会のご案内 | …………… | 服部 力 | 13 |
| 学 会 記 事 | : 理事会報告① | …………… | | 16 |
| 学 会 記 事 | : 理事会報告② | …………… | | 16 |
| 学 会 記 事 | : 会員消息 | …………… | | 18 |



テングタケを食べるリス

ニホンリスの写真を撮り始めて今年で8年目になります。ニホンリスの主食は、クルミや栗などですが、デザート感覚でキノコも好んで食べています。生息地には、テングタケ類の毒キノコも発生しており、時々その傘に何者かにかじられた形跡があるので不思議に思っていました。ある時、地上を走るニホンリスを追っていたところ、テングタケを見つけて、迷うことなく食べ始めたので目を疑いました。テングタケは一回でとても食べ切れる量ではなく、注意して観察していると、何日か

続けて食べにやって来ており、どうやら安全に食べているものと思われます。その後の観察で、ベニテングタケ、コガネテングタケ、ドクベニタケ等の毒キノコも食べている姿を確認しました。ニホンリスがテングタケ類を食べることは知られておらず、神戸大学の末次健司准教授（現在教授）と2021年12月に国際誌「Frontiers in Ecology and the Environment」に発表して予想外の反響を得ました。

五味孝一

国際・公開シンポジウム

「様々な環境に存在する菌類～多様性・エコロジー・インパクト～」

開催報告

廣岡裕吏（法政大学）・埋橋志穂美（農業・食品産業技術総合研究機構）・
細矢 剛（国立科学博物館）

国際・公開シンポジウムは、第66回日本菌学会大会期間中の8月21日（日）8:45～11:00（JST）、Zoom ウェビナーにてオンライン開催された。本シンポジウムでは、異なる環境に存在する菌類の多様性についての理解を深めるため、室内、森、海、乾燥地そして腸内といった様々な環境に生息する菌類について、各分野の専門家の方々にご講演いただいた。日本菌学会の会員・非会員の別を問わず、研究者やアマチュアの方々に広く参加いただくため、関連学会のメーリングリストやSNSを活用した開催案内を実施し、事前登録のうえ無料で聴講できる場とした。発表は、研究者の視点から捉えたきれいな写真を多用したスライドや演者の先生方の菌類に対する興味や想いがあふれた素晴らしい内容であった。発表後の質疑応答でも活発な議論、意見交換が行われた。

講演者および演題は以下の通りである。

Introduction（はじめに）

Yuuri Hirooka (Hosei University, Japan)

1) Fungi from the indoor environment（室内の菌類）

The Secret House: Fungal Biology and Diversity in the Built Environment.

Keith A. Seifert (Carleton University, Canada)

2) Fungi from the forest（森の菌類）

From the Inside out: Niches of Forest Fungi

Joey B. Tanney (Canadian Forest Service, Natural Resources Canada, Canada)

3) Fungi from the marine environment（海の菌類）

A Deep Dive into Marine Mycology: Fungi from Marine Habitats

Allison K. Walker (Acadia University, Canada)

4) Fungi from drylands（乾燥地の菌類）

Fungi from drylands: Antarctica to the Mojave Desert.

Jason E. Stajich (University of California, Riverside, USA)

5) Fungi from the gut environment（腸内環境の菌類）

Fungal Diversity in the Herpetile Gut: Bacterial-Fungal

Interactions Shape the Gastrointestinal Tract of Amphibians
Donald M. Walker (Middle Tennessee State University, USA)

Discussion（総合討論）

シンポジウムの受付には Google form を利用した。このフォームは日本語で作成したため、海外からの参加希望者に対しては、主催者がメールで希望を受け付け、代理で入力した。非大会参加者からは、116名の事前申込みがあった。その中には、中国やアメリカ、ベトナム、ドイツ、南アフリカからの申込があり、まさに前回と同様、国際シンポジウムとしてふさわしい会となった。当日の参加者数は、パネリスト、主催者、運営担当者を含め最大130名であった。なお、大会参加者には本シンポジウムへの事前の参加申し込みは不要としたため、この人数を正確には把握できないが、当日の顔ぶれやアンケートの結果から、数十名の参加があったと思われる。

本シンポジウムの開催では、このために契約した Zoom のウェビナーを使用し、本番でのトラブルを避けるため、各講演は事前録画されたビデオのオンライン配信にて実施した。また、質疑応答では、Zoom ウェビナーの Q&A 機能を用いて行い、自由に質問、意見を投稿できるようにした。投稿された質問は画面で共有しながら総合討論で取り上げ、すべての演者がパネリストとしてライブ出演し、各質問にお答えいただいた。質問に対して演者から直接話を聞くことができ、大変貴重な機会となった（図1）。討論では、建物、森、海、乾燥地、腸内から確認される菌類の分離や分類、生態等について、様々な議論が行われた。総合討論として設定した30分間、それぞれの演題に対して満遍なく複数の方々と多くの議論ができたのではと感じている。

終了後、Google form によるアンケートを実施し51名（39%）からの回答が得られた。本シンポジウムの開催案内については日本菌学会大会ホームページからの入手が最多、続いて日本菌学会メーリングリスト、日本菌学会ホームページであり、菌学会関係からの情報収集が主であった。回答者の内訳は社会人（職業研究者、ポスドク）

が72.5%と最も多く、学生参加者は大学院生(13.7%)、学生(3.9%)であった。参加者の所属学会では日本菌学会所属が62.7%と最も多く、続いて日本微生物資源学会が21.6%であり大部分が菌学会関係者と思われた。開催案内の入手方法と合わせ、本シンポジウムは主に菌学会関係者の関心が高かったと想像される。

コロナ禍でオンライン開催も一般化してきた中、「オンライン開催」が望ましいとの回答は49%と約半数であり前回の91.2%と比較すると大きく減少した。一方で、「どちらでもよい」が39.2%であり、「対面が望ましい」は2%(1名)と、開催方式については特にこだわらず、柔軟に対応している様子が窺えた。全体的な日程については、「土日であれば比較的自由がきくため参加しやすい」、「時差を考えると開催時間も妥当である」などポジティブな感想が多かったが、休憩時間が無かった点を指摘する意見もあった。対面とは異なり、参加者はモニターを見続けることになるため、途中の休憩は必要かもしれない。本シンポジウムではQ&A形式を用いて質問を受け付けたが、「対面とくらべ質問がしやすかった」が71.1%と高く、「質問を文字で画面共有した点を評価する意見」も得られた。一方で、「個々のプレゼンの後にもQ&Aがあった方がよい」、「すぐに回答が得られず質問しにくかった」という意見もあり、進行方法については改善の余地も見られた。

スライドに字幕表示をつけた前回とは異なり、今回はその表示を行わなかったが、聞き取り状況および理解度について5段階評価で回答いただいたところ、聞き取り状況について最も高い評価が19.6%、続いて47.1%と半数以上の参加者は概ね聞き取れていたようである。理解度については、高い方から、15.7%、37.3%、29.4%、15.7%および2%であった。話すスピードや写真等の画像を多用するなど演者による工夫もあり、英語のみの発表でも比較的 understanding が得られたと想像する。視聴者の能力向上のためにも、字幕無しでの開催を継続しても良いように思う。また、シンポジウムの内容について5段階評価で回答を求めたところ、最も高い評価が37.3%、続いて41.2%と、約80%の回答者から高い評価が得られた。特に「幅広い分野にわたる講演内容について、とても興味深く拝聴した」、「多様な菌類について知ることができた」、といった感想や、「広い菌類の世界において、普段は特定の菌類しか見ていない(無意識的に切り捨てている)ことを思い出させてくれる貴重な機会となった」、という感想もあり、専門分野を超えた内容に新鮮さや興味を感じた参加者も多くみられた。

最後に今後のシンポジウムで取り上げて欲しいテーマについて回答を求めた。より専門的な内容を求める意見としては、「真菌類のゲノム解析」「菌類のゲノムと分類について」「菌類の分類学の動向、命名規約、新種記載方

法」また「糞性菌の多様性と生態」などがあつた。また、自然環境における菌類の役割について、「近年山火事や水害が多発しているが、植生や菌類相への影響(破壊と回復の進行など)について」や「環境中での何らかの作用に対するFungiの貢献度について」といった回答があつた。生態系における菌類の役割、環境問題に菌類が果たす役割や重要性といったテーマを取り上げることで、グローバルな視点で菌類の社会的重要性を共有することも良いかもしれない。

今回の国際・公開シンポジウムは、去年に引き続き2回目のオンライン開催となった。コロナ禍でオンライン会議や学会が主流となっている中、主催者、参加者共にオンライン開催に慣れてきたこともあり、前回の反省点(Q&Aの質問内容の共有など)を活かし、より円滑な運営、開催が出来たのではないかと感じている。オンライン開催は対面開催と比較し、シンポジウム終了後に講演者や他の参加者と自由にディスカッションをしたり、情報交換を行う機会が得られない点は残念であるが、参加に伴う出費や時間的制約の観点からより多くの方が参加可能なツールである。この利点を活かし、今後も菌類に関する幅広い情報や知識をグローバルに発信し、研究者や一般の方々が菌類に対する知識を共有し、理解を深めることで今後活かしていただけるような機会を提供できればと思う。

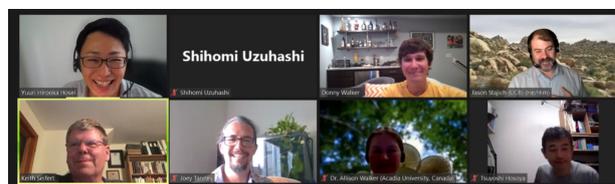


図1. 当日のシンポジウムで行われた総合討論の様子

E-mail: yuurihirooka@hosei.ac.jp (廣岡裕吏)

2022 年度日本菌学会菌類観察会（八王子フォーレ）開催報告

丸山厚吉（東京都立大学・実行委員長）



日本菌学会主催の菌類観察会（フォーレ）は例年2泊3日の日程で開催されてきましたが、今年2022年の東京都立大学を本部とする八王子フォーレは日帰りで計画されました。当初2020年に開催予定でしたが新型コロナウイルスの流行により順延となりました。2021年も同じ都立大学での開催が計画されましたが、感染症の影響で観察会は再度順延し、同年9月26日にWebでの開催となりました。Webでの開催はZoomにより行われ各地のきのこ同好会の紹介や丸山による講演（演題：ワタカラカサタケの仲間について）が行われ、100名前後の人達が参加しました。2022年は8月に感染の第7波が生じ開催が危ぶまれましたが下旬には下火となり、漸く9月25日に開催することができました。企画立案委員は菌類懇話会の谷口雅仁氏を中心に、糟谷大河氏、名部みち代氏、種山裕一氏、松井英幸氏、丸山が3年間担当しました。3年間都立大学での開催を計画できたのは都立大学牧野標本館の村上先生のお力添えが大きいと思います。

日帰りの観察会では当日9時に受付を開始、10時から松井英幸氏の司会により開会式が行われ、実行委員長丸山、日本菌学会会長細矢剛氏、東京都立大学の植物系統分類学研究室（牧野標本館）の村上哲明教授の挨拶が行われ、次に国立科学博物館の保坂健太郎氏から採集品の同定記録カードへの書き方の説明がありました。10時半に写真撮影した後、3コースに分かれて観察地に出発しました。参加者は総勢54名でA松木日向緑地・富士見台公園15名、B長池公園15名、C津久井湖城山公園24名で



大学での集合写真

した。B、Cコースへはバスでの移動です。

A 松木日向緑地・富士見台公園コースは東京都立大学の

敷地内にある松木日向緑地と大学の東に隣接する公園です。落葉広葉樹林でコナラやクスギを主体とし、ホオノキ、アカシデ、アブラチャン、エゴノキなどの雑木林で、シラカシ、アラカシなどの常緑樹も混じります。富士見台公園も同様ですがサクラ、ケヤキなども植林されています。案内 丸山厚吉（東京都立大学）

B 長池公園コース 八王子市が管理する公園で植生は良く管理保護されており、コナラ、クスギなどが主体です。池に面したハンノキ林は普段は入れない保護林になっていますが今回は採集の許可が出ました。案内 松井英幸氏（東京きのこ同好会）



長池公園にて

C 津久井湖城山公園コース 今回参加希望者が一番多かったコースで、大学から10kmほど西に離れた神奈川県津久井湖の南に位置します。公園の中心には375mの城山があり高低差のある公園です。ここはコナラ、クリ、アラカシ、ウラジログシなどを主体とする落葉樹常緑樹の混交林で、モミ、アカマツなどの針葉樹も混じり低いところにはスギの植林地があります。神奈川県キノコの会の定点観察地で珍しいミミブサタケ、フチドリトゲミノツエタケなどの発生記録があります。案内 武田敏夫氏、三村浩康氏（神奈川県キノコの会）

昼食は各自で用意したものをコースごとに済ませ、13時30分には大学に戻りました。採集品は交流スペースのブルーシートの上に並べられ、各自同定記録カードに記入し、分類群ごとにアリーナの机に並べ、他者の意見を聞いたり、他グループの人達が採集したものを確認したりしました。

その後分類群ごとに保坂氏、服部氏、細矢氏、太田氏、



津久井湖城山公園への移動



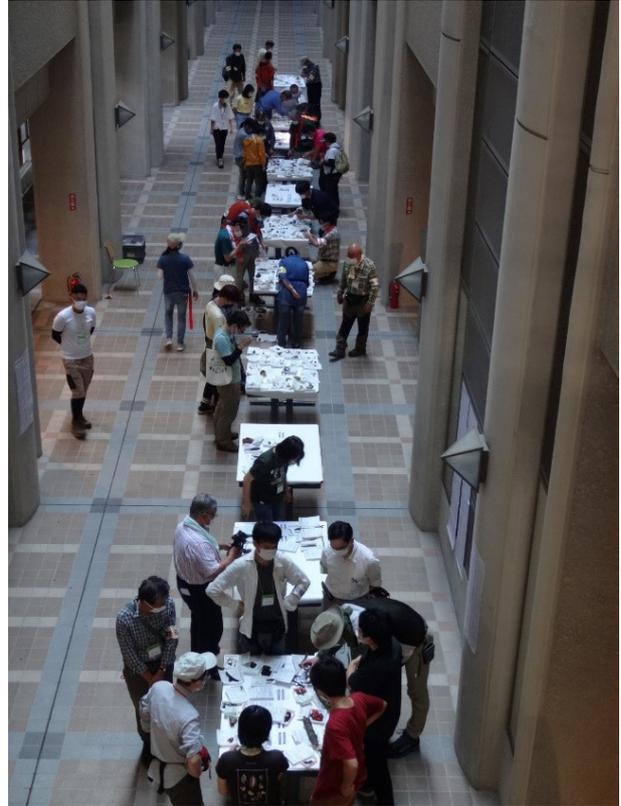
大学交流スペースに採集したきのこを並べて

糟谷氏、折原氏などの専門家から採集された標本の解説が行われました。

ところで今年 2022 年の八王子のきのこの発生状況はどうだったでしょうか、実行委員としてはとても心配な点です。2021 年の夏は気温が高く、秋の降雨も十分でなかったために不作であったと思います。2022 年は夏の気温が高めで、降水は時々ある状態が続いていました。フォーレ開催の前々日には台風 14 号が日本海側を通過し、前日には台風 15 号が太平洋側をかすめたので当日の天候が心配されましたが、幸い天候は回復し、きのこの発生・採集には好条件でした。会場に並べられた採集品をみると、机の上にはかなりの数があり八王子のこの季節にしては数がそろったのではないかと感じ、安心した次第です。採集品を見ると本格的な秋の種類というよりも、夏のきのこがかなり混じっていたと思います。なお採集品の具体的な目録については別項で掲載されます。

前回から 2 回にわたり延期となり、その間いろいろな企画の変更、Web での開催等々、長い間携わって下さった方々、特に神奈川キノコの会、東京きのこ同好会、菌類懇話会の方々には大変感謝致します。また場所を提供して下さった東京都立大学の方々、当日お手伝いいた

いた学生の方々に感謝致します。



アリーナに並べられたきのこ



専門家による採集品の説明

E-mail: vp9k-mrym@asahi-net.or.jp (丸山厚吉)

Asian Mycological Congress 2021 参加報告



AMC 2021 参加報告

板垣ひより (東京大学)

昨年8月、日本菌学会からの助成金を拝受し、タイランド・サイエンスパークで開催されたアジア国際菌学会 (AMC2021) に参加しました。2021年に開催予定だった本学会は、新型コロナウイルス感染症の流行によって1年延期となり、会場と世界各国をオンラインでつなぐ、ハイブリッド開催でした。私にとって国際学会は、4年前に三重県で開催されたアジア菌学会 (AMC2019) に引き続き2回目の参加なので、今回はぜひとも海外で発表したいと考えていましたが、長引くコロナ禍と博士論文準備のため、やむを得ずオンラインでの参加としました。ハイブリッド形式かつオンラインでの学会は初めてでしたが、どのセッションもスムーズに進行され、会場の雰囲気や熱気がPCモニターを通じて伝わってくる場面が多々あり、とても興味深く最先端の研究成果を知ることができました。

私は最終日 (8月5日) の午後のセッション PS9 (Biodiversity and Systematics: Ascomycota) にて、"A new genus and species of mollisoid fungi in Japan with preliminary phylogenetic analysis of *Mollisia sensu stricto*" というタイトルで、アジア原産のイネ科植物を主な宿主とするモリシオイド菌類 (子囊菌門ビョウタケ目: 写真) に対する新



新属新種として発表したモリシオイド菌類 (一部)

属の提唱について口頭発表しました。一般講演は、基本的に事前録画を流しての発表だったため、比較的落ち着いた口調で分かりやすく研究内容を伝えられたかと思えます。本セッションでは、座長の方もオンライン参加でしたが、時折、何度も頷きながら発表を視聴されている姿がワイプで見え、安心感を覚えました。その一方で、発表の裏では、予期せぬアクシデントがありました。というのも、直前まで運営事務の方と動作環境の確認をしていましたが、インカメラのピントが上手く調整できていないまま質疑応答へと移ってしまったのです。結局、顔はおろか画面全体に霧がかかり、それもあって焦って質問者の意図をうまく汲めないまま返答してしまうなど、やや残念な結果となってしまいました。

オンライン参加では、講演と質疑応答の時間を除くと、他分野の研究者や同期の学生との交流がほとんど図れず、物足りなさや寂しさを感じました。現地から帰られた先生方や友人から、実際の会場や宿泊地の様子、グルメ、観光の様子などの土産話を聞きながら、三度目の正直で次こそは現地参加したいという強い思いを抱きました。

最後に、研究の遂行と発表にあたり指導教員の細矢剛先生 (国立科学博物館) からは、熱心なご指導を賜りました。また、木材の樹種識別技術をご教授いただいた能城修一先生 (明治大学) に深く感謝いたします。本学会の運営に当たられた関係者の方々、ならびにご支援いただいた日本菌学会の皆様はこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

E-mail: itagaki@kahaku.go.jp (板垣ひより)

e-poster および現地参加の 所感 (AMC2021 参加報告)

名田卓磨 (筑波大学)

タイ王国で開催された AMC2021 に現地参加できたので、e-poster と現地参加を体験した私の所感を伝えたい。参加費の助成をいただくことができ、大学の渡航制限が解除されるなど幸運が重なって実現した現地参加であった。前回大会の AMC2019 に単なる聴講者として参加した際、次の大会では発表者として参加したくなったので、

今回大会で発表できたのは大変光栄だった。発表形式を選択する際にポスター発表を選んだのは、ポスター発表では聴講者と相互のコミュニケーションがとれて、機会があれば聴講者の研究を聴き、関連分野の研究の友を作ることができそうだと期待したためだった（決して口頭発表に採択されなさそうだと悲観した訳ではない）。今回の発表形式は e-poster ということで、どのような発表となるのか楽しみな反面不安であった。

筑波大学植物寄生菌学研究室からは私を含めて 5 人の学生と 1 人の教員（岡根泉先生）が現地参加した。そのうち 4 人にとって AMC2021 が初めての海外開催での国際学会だった。渡航の準備にける仕事量は各々の性格に強く依存していた。中でもインターネット環境の構築は最も大事な準備だった。私と宮澤君（現筑波大学地衣類研究室）はタイで使用可能な Sim カードを用意せずに渡航したため、Wi-Fi がないと連絡を取ることすらできず、渡航後は度々不便な状況に遭遇した（ただし、大きな施設には基本的にフリー Wi-Fi があった）。少ない通信量でもいいから、必ず海外でも使える Sim カードを利用すべきだと強く感じた。私たち二人は航空券のトラブルから夜遅くに現地入りしたラボメンバーを待つため、暇つぶしにバンコクの繁華街をぶらついた。ここではリサーチ不足のためにぼったくりのディナーを楽しみ、連絡手段がないために慌てて空港へ戻る道すがら、トクトクでもぼったくりに遭ってしまった（後で現地の学生に聞いたところ、相場の 6 倍超だった）。些細な事でも先達がいって欲しいものである（兼好法師、発行年不明）。

本大会の e-poster の発表形式は賛否両論だったのではないか。本大会のプログラムは現地開催の口頭発表を中心に据えていた。e-poster はオンラインの公式サイトその他、会場のデジタルサイネージで展示され、数秒ずつ公開された。ここで渡航前の悪い予感が当たった。数秒ずつしか表示されなくては流石に研究を紹介できない。オンライン上では常に公開されているのだから、注目された研究ならばメールで質問が来るのだろう。しかし残念なことに、12 月現在未だに私の e-poster に質問は来ていない。現地参加した他のラボメンバーのところにも質問は来ていない。大変寂しいことである。かく言う私も実は e-poster の発表には一切質問を投げかけていない。面白い発表はあったが、「メールで尋ねる程の内容の質問だろうか？」と自問自答し、どうせ少し待てば論文になるだろうと勝手に納得した結果だ（決してわざわざメールで質問をするのが面倒だった訳ではない）。従来のポスター発表ならコアタイムになればポスターの前に発表者がいるのだから、その場で質問をすればいいのだ。やはり、一方通行の研究発表には限界があるのだろう。もはや、ポスター貼り逃げが公式に許されている状態だと感じていた。一方で、e-poster ならば紙のポスターよりもはるかに

多くの発表を受け入れられるだろう。実際、私は従来のポスター発表では実現できなかったであろう大量のポスター発表を読むことができた。デジタルサイネージで表示された誰かの e-poster を眺め、面白そうならばオンライン上で詳しく読んでみることで、普段ならば触れなかった分野のポスター発表にもアクセスできた。オンライン上に公開されたままならば、大会後も人目について質問が来るかもしれない。e-poster は過渡期にある。e-poster でも紙のポスターと遜色ない発表ができる様、大会運営を柔軟に構築して欲しいと感じた。

大会期間中は岡根先生の様々な知人や友人を紹介してもらい、先生の顔の広さを実感した。紹介されなければ会場の隅でコーヒーを飲んで終わっていたかもしれない。大会の後半にはタイ国立遺伝子生命工学研究センター（BIOTEC）のジェニファー先生を紹介してもらえた。あまりのビッグネームに震えた。私の研究テーマを紹介したが、残念ながらあまり伝わっていない様子だった。彼女のご厚意で BIOTEC のラボ内を案内してもらい、彼女のラボメンバーのゲーム博士に研究の紹介してもらった。その後、ジェニファー先生のラボメンバーと会食に行き、自己紹介と研究の話をする機会を得た。席次に恵まれ、私と岡根先生の間になんと遅れてやってきたジェニファー先生が座った。ジェニファー先生にここぞと必死に私の研究テーマを紹介したが、あまり手ごたえはなかった。私の英語力の低さもさることながら、レストランでは爆音でライブが開催されており、来場者が踊り狂って騒いでいたのでそもそもまともな会話自体厳しかったのだ（感染対策は徹底されていた）。結局あまり意思疎通ができないままジェニファー先生は早めに帰ってしまったが、一緒に踊っていたジェニファー先生のラボメンバーとダンスを通して仲良くなることができた。またの機会にもっと英語力を上げて食らいついていきたいと感じた。



感染対策が徹底されたレストランにて

引用

吉田兼好（発行年不明）徒然草、第 52 段、仁和寺にある法師、（西尾実校訂）、岩波書店、東京、p 35

AMC2021 参加報告 大巻彩乃 (筑波大学)

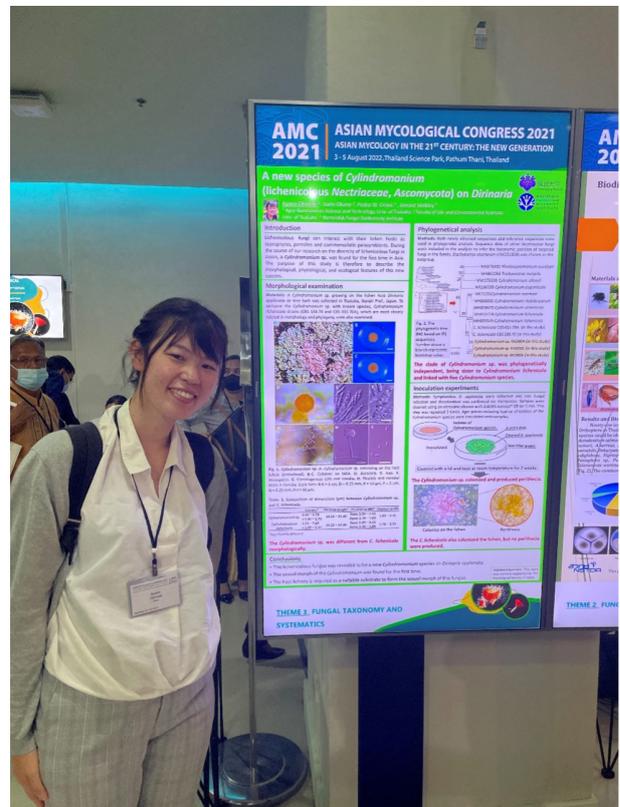
2022年8月3日から5日にかけて、タイ、パトゥムターニの Thailand Science Park Convention Center にて AMC2021 が開催され、私は日本菌学会より参加費のご支援を受けて参加させていただきました。昨今の世界的な感染症の流行により、多くの学会がオンライン開催される中、本大会はオンライン開催と対面開催のハイブリット形式でした。私はこれまで国際学会に参加したことがないだけでなく、国内の学会も対面で参加する機会に恵まれませんでした。せっかくの現地で海外研究者の方々と直接お会いする機会でしたので、同じ研究室のメンバーと現地参加いたしました。

大会前日、羽田空港から約6時間半かけてバンコクのスワンナプーム空港に到着しました。大会会場近辺で予約した宿は空港からタクシーで約1時間(有料道路含む)、公共交通機関で約3時間かかる場所にありました。タクシーだとぼったくられるリスクがあることを考慮して、電車とバスを利用して宿に向かうことにしました。スワンナプーム空港からモチット駅までは電車を利用しましたが、バンコクの電車は想像以上に都会的で驚きました。綺麗な駅舎や車両、外国語に対応した券売機があり、山手線並みの間隔で電車が運行していました。真にタイらしさを体現していたのはモチット駅からのバスでした。私たちがすし詰め状態のローカルバスに乗り込むと乗務員が近寄ってきました。乗務員に行き先を伝えると、距離に応じた運賃を提示され、それを払うと代わりに乗車券を受け取ることができるようでした。しかし、英語で説明しても地図アプリで示してもなかなか目的地が乗務員に伝わりませんでした。そんな私たちを見かねて、現地の大学生が翻訳してくれたお陰でなんとか目的地が伝わり、乗車券を手に入れることができました。彼らの助けがなければ、私たちはバスを降ろされていたでしょう。バスの乗り心地はなかなかスリリングでした。バス停に着くとバスが完全に停車しないうちから乗車口の扉が空くので、振り落とされるのではないかと肝を冷やしました。また、私たちが乗ったような一部のバスには降車ボタンがありませんでした。目的地が近づいたら走行中でも降り口に移動して、扉の前で待機することが降車の合図となるそうです。降り方を教えてもらってなんとか目的地に到着することができました。約2時間の長いバス旅でしたが、運賃は十数パーツ、日本円にして50~60円と破格の値段でした。多少運賃が高くてもタクシー

で行った方が便利だったとは思いますが、沢山の現地の方に親切にいただき、タイらしい交通渋滞やスリリングな運転を体験できて、非常に良い経験となりました。

大会が始まると、現地参加者らは講堂やセッションごとに割り振られた部屋にて口頭発表を聴講しました。ポスター発表に関しては、大会のHP上ですべてのポスターが常時公開されており、発表者のメールアドレス宛にメールを送ることで質問することが可能でした。また、現地会場にはポスターが数秒ごとに入れ替わるスライドショーが映し出された電子モニターが2台設置されていました。このような形式だったため、口頭発表に関してはその場で質問したり、熱い議論を交わしたりすることが可能でしたが、ポスター発表に関しては議論を始めるにはハードルが高かったように感じました。

私は大学院で地衣類の上に生息する地衣生菌に関する研究を行っています。本大会では A new species of *Cylindromonium* (lichenicolous Nectriaceae, Ascomycota) on *Dirinaria* というタイトルで、地衣生菌 *Cylindromonium* sp. についての系統分類学的検討と接種試験の結果についてポスター発表させていただきました。地衣生菌の研究はマニアックな側面があるため、海外のコアな研究者の方とお話して研究に関する助言をいただけないかと淡い期待を抱いておりましたが、残念ながら私のポスターに関してメールで質問を頂く機会には恵まれませんでした。現地で知り合った学生とお互いの研究について話す機会に恵まれました。また、3日目の Asian Mycology のオー



ポスター前にて

ラルセッションでは、スリランカの地衣生菌の多様性に関する研究が発表されていたため、聴講しました。培養可能な地衣生菌の割合について質問をする機会にも恵まれ、大変有意義なものとなりました。

会期中は口頭発表を積極的に聴講することで、視野を広げることができました。また沢山の研究者や学生と直接お話しして交流することができたのも貴重な経験です。

一方、自身のポスター発表に関しては、今回の学会の発表スタイルや、自分の研究テーマの馴染みのなさを理解した上で、多くの人に興味を持ってもらえるテーマ設定やポスター構成にするべきだったと反省し、今後の発表の機会に活かしたいと思いました。

最後になりますが、AMC2021に参加する機会を得たことは大変貴重な経験になりました。本大会のために助成をしていただきました日本菌学会の皆様と、発表にあたってご指導いただきました先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

E-mail: s2120986@s.tsukuba.ac.jp (大巻彩乃)

AMC2021 Participation Report Indriati Ramadhani (University of Tsukuba)

I have participated Asian Mycological Congress 2021 (AMC2021) as an online participant. AMC2021 was held by National Center of Genetic Engineering and Biotechnology (BIOTEC), National Science and Technology Development Agency (NSTDA), Ministry of Higher Education, Science, Research, and Innovation (MHESI) on 3-5 August 2022 at the Thailand Science Park, Pathum Thani, Thailand. On this occasion, I presented the study entitled, "A novel species of *Oidiodendron* and a new record of *Oidiodendron maius* from Indonesia." This study aims to clarify the taxonomy of two *Oidiodendron* species isolated from ectomycorrhizal root tips. *Oidiodendron* may have contributed to the nutrient uptake of *Pinus merkusii* in the form of association as ectomycorrhiza (EcM). There is still a lack of studies proving that this fungus can be found as EcM fungus. *Pinus merkusii* grows highly dependent on EcM fungi especially for phosphate uptake. This study reports two *Oidiodendron* species that act as EcM fungi. This study was presented in an e-poster presentation session. There was 36 e-poster on the theme of fungal taxonomy and systematics from different countries. As we know, Indonesia is

one of the megadiversity tropical countries, but unfortunately still lacks knowledge or unexplored well in the fungal diversity-related subject area. Therefore, AMC2021 became a good place for sharing knowledge of the biodiversity of Indonesia, especially on mycology. I am keeping up hope to continue conducting research related to the fungal diversity of Indonesia in the future. The important thing, I would like to say thank you and give immense appreciation to the BIOTEC staff for making such a great and memorable event.

E-mail: s2136026@s.tsukuba.ac.jp (Indriati Ramadhani)



AMC2021 のオンライン参加 の報告 李 知彦 (筑波大学)

本稿では2022年8月にオンサイト・オンラインのハイブリッドで開催されたAMC2021の参加報告をしたい。私の場合、今回が初めての国際学会の参加であり、オンライン参加でポスター発表を行った。口頭発表については4つの会場で並行して講演が行われていたが、ポスター発表は発表者がオンサイト・オンラインのどちらで参加しているかを問わずに、AMC2021のオンラインページにポスターが掲載され、現地会場でのポスター掲示は無かった。また、パネルディスカッションなどのポスターの発表時間の枠は取られておらず、学会側でポスターに関する質疑応答を行うことができる場は用意されていなかった。ポスターに掲載した自身のメールアドレス宛にメールが来ていないかは開催期間中チェックしていたのだが、残念ながら一通も届いていなかった。そのため、今回ポスター発表で参加したものの、自身のポスターがどれぐらい他の参加者に見られたか、といった発表した感触も得られず個人的には味気ない学会参加であった。

今回の学会ではオンライン・ポスター発表での参加者

の場合、人との交流はかなり困難であったが、最近ほどのような研究がされているのかを把握するという目的は十分に達成することができたように思う。ポスター発表は合わせて83件の登録があり、分類や系統に関するものが多かったが、ゲノミクスや生理、植物病理、医真菌などの分野の発表もあり、多様な分野の研究知見が得られた。また、国内の学会ではあまり見られないスタイルのポスターもいくつか見られ、今後自身のポスター作成に活かしたくなるようなものもあった。口頭発表の方は、ここ数年参加した日本菌学会大会ではあまり見かけない海生菌のセッションが印象深かった。内容としては多様性だけでなく、分解酵素からバイオテクノロジーへの応用に関する研究も紹介されており、大変勉強になった。その他にも日本とはかなり異なる環境に生息する菌類、具体的には岩生菌や乾燥地の菌類の多様性や群集組成に関する研究も自分にとっては目新しく、興味深かった。また、論文を拝見したことのある研究者の講演を聞くことで、論文上では見えてこないような、研究者の人となりや実際の興味関心の予先が何であるかを知ることができ、このような発表の場でないと得難い経験ができたと思う。

AMC2021は当初オンサイトでの開催を予定していたこともあり、ハイブリッド開催の形式がやや洗練されていないように感じた。だが、現在はハイブリッド開催の技術や知見が当時よりも蓄積されているため、今後開催される国際学会ではオンライン参加でも研究者同士の相互交流は容易になっていると想像される。但し、今回のように口頭発表かポスター発表かで交流の有無が大きく変わることもあるため、参加登録する際には開催プラットフォームや開催スケジュールを確認するのが重要だと思う。

E-mail: ri.tomohiko.sg@alumni.tsukuba.ac.jp (李知彦)

AMC2021に参加して 柴田紗帆 (法政大学)

2022年8月3日から5日の3日間、アジア菌学会2021 (Asian Mycological Congress 2021) がタイのパトゥムターニーならびにオンラインで開催されました。本大会で私は、現地には向かわず、オンラインでのポスター発表を行いました。新型コロナウイルス感染症以降、移動制限がしかれていた身としては現地に行かずとも、発表の機会をいただけたことは大変ありがたく思いました。現地には出向かなかったことから、前回プエルトリコで行わ

れた国際学会の時のように飛行機が時間通りに飛ばない、激しく揺れる機内で具合を悪くするというようなことは当然ありませんでした。しかしながら、参加費の支払いにおいてトラブルを経験しました。クレジットカードで支払いを希望し、払い込み締め切りぎりぎりまで失念していたところ、選択肢を誤ったらしくクレジットカード払いが選べなくなっていました。今回は、運営の方々に連絡したところ即座に対応していただけたため事なきを得ましたが、国際学会に参加する際は時間的に余裕を持った行動が改めて重要であると感じました。

大会中にはスライドやポスターの色使いに異国情緒を感じながら、新たな学びを得ることができました。自身はツツジ類てんぐ巣病菌 *Exobasidium pentasporium* のタイプ指定について発表しました (タイトル; Typification of *Exobasidium pentasporium*, a causal agent of witch's broom disease on *Rhododendron* species)。本菌はモチビョウキンにしては珍しく、植物に対して大きな被害をもたらすことが知られています。本菌が感染した病枝は、長い年月をかけて叢生しててんぐ巣症状となり、罹病部位は徐々に衰退し最終的に枯死します。そして本病は枝だけでなく幹の根本にも発生し、樹全体に感染して時に1つの樹に十数か所発生することも珍しくはありません。近年では天然記念物のヤマツツジに発生し、防除が求められる重要な病原菌です。*E. pentasporium* は、1896年に白井光太郎博士により記載された本邦初のモチビョウキンの1つでした。しかしながら、現在の命名規約が制定される以前に記載された種であったことから、基準標本の所在は明記されず、基準標本由来の菌株やシーケンス等もありませんでした。本研究の結果、国立科学博物館から原記載の内容と一致する標本が発掘され、さらにタイプロカリティの日光において新たに本種が得られたことから、これら標本をもとにタイプ指定を行いました。今回の学会ではポスター発表でのオンライン参加者の質問の時間が設けられていなかったこともあり、議論ができなかった点はやはりオンサイトの学会と比べてときの満足感に差を感じました。また、現地に行くことができなかったことで心残りなことが一つあります。タイの角もち病を見ることができなかったことです。2018年、タイの国立公園内のニッケイ属植物に角もち病菌 *Laurobasidium hachijoense* の発生が報告されています (Somrithipol et al. 2018)。八丈島や小笠原諸島に知られる角もち病と同じく幹や枝に叢生するように黄褐色のゴールを形成し、そのゴール表面を白色に覆う菌類は形態・分子系統解析により、日本の角もち病菌と同種であると同定されました。しかし、論文に見られる樹上のゴールの様子は日本のヤブニッケイなどに見られるゴールより1つ1つが細長く、垂れ下がるようであり、鹿角状というより植物の根のような姿をしていました。何がそうさせているのか、

その発生地も含めて自身の目で見てみたいと感じます。地域限定の菌類を探し見ることもやはりオンサイト開催の醍醐味だと思っています。近頃かつてのような日常が取り戻されていることから、次に期待し、研究に精を出したいと思います。

最後にこの度は国際学会参加のためのご支援をいただき、この場を借りて日本菌学会の皆様にご挨拶いたします。そして、日々熱心なご指導をくださる先生、および支えてくださる研究室の皆様がこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

引用文献

Somrithipol, S., Jones, E. B. G., Sommai, S., Suetrong, S., Mongkolsamrith, S., Nathalang, A., Pinruan, A. (2018). Laurobasidiaceae fam. nov. (Exobasidiales, Basidiomycota), a new family for fungi causing galls with aerial root-like outgrowths, with a new record from Thailand of *Laurobasidium hachijoense* on a new host, *Cinnamomum subavenium*. *Phytotaxa*, 347, 150-164.

E-mail: saho.shibata.3w@stu.hosei.ac.jp (柴田紗帆)

最近参加した3つの学会で感じたこと

佐藤大樹（森林総合研究所）



2022年7月に国際ユスリカシンポジウム（つくば）、8月初旬にタイで開催されたアジア菌学会、そして同下旬の菌学会大会（大阪）に参加した。これらで感じたことを元に、来年の日本菌学会熊本大会について考えた。

国際ユスリカシンポジウム（オンライン開催）：LINC Biz（オンライン会議システムの一つ）を用い、シンポジウムではライブ配信による招待講演者の口頭発表、個人参加の場合はポスターのファイルを指定のウェブサイトにアップロードし、そのサイトでチャットへの書き込み形式で質疑応答を行った。ポスター発表のための時間は設けられておらず、参加者数は少ないものの3日間の開催期間中にポスターを見ることは結構大変であった。ただし、終了後も数日間大会サイトが継続しており、ポスターへのコメントが増加した。大会後のオンラインサイトの継続は良い仕組みだと感じた。

アジア菌学会（ハイブリッド開催、現地参加）：まず、今回コロナ禍にもかかわらず現地開催を含む国際学会運営をしていただいたスタッフに感謝申し上げる。

口頭発表によるシンポジウムは、現地参加者そしてライブ配信による発表の混在する形で進められた。司会者も含め全ての発表者がオンラインの口頭発表というシンポジウムがあったが、途中で聴衆がいなくなり予定時刻前に終了した。現地参加者は対面による会話が目的の一つなので、画面からの情報に限られる発表形式では人を呼ぶことが適わなかったのだろう。オンライン発表のみが集中したセクションを作らないことは、今後のハイブリッド大会を運営する上で考慮すべき重要な点だと感じた。休憩時間が一番盛り上がっていた。

ポスター発表は、大会のウェブサイト上にアップされたものに各自のパソコンからアクセスする方式であった。こちらでもポスターのための時間は設けられていなかった。夜にホテルで閲覧したが十分な時間は作れなかった。質問は直接本人にE-mailで送付する方式であった。この方式では質問が共有されず、発表者は同じ質問に何回も回答することになる。オンライン会議システムにより画面上に書き込む形式の方が便利である。空き時間に、掲示されたポスターをふらっと見られるありがたさ？を感じた。なお、会場ではポスター映像が身長大の縦長モニターにスライドショー形式で紹介されていた。

日本菌学会大阪大会（オンライン開催）：LINC Bizを用い、全員同じ様式の発表動画をアップロードした。大

会期間は8日間と見た目は長いが十分な閲覧時間とウェブサイトで書き込み形式による相互意見交換を行った後に、土日に全員が同じチャンネルで討論できた。これは、完全オンライン開催の強みを最大限に生かした運営方式だと感じた。

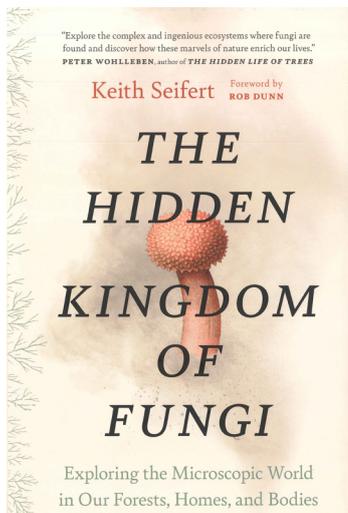
そして、熊本大会を想像した。熊本大会はハイブリッド大会として予定されている。会場費がかかるので参加費もオンライン大会のようなわけにはいかないだろう。オンライン参加でも、発表は会場からの配信なので会場を利用していることになる。運営上の留意点として、コロナの流行状況により完全オンライン化もありうる。その時には、会場のキャンセル料も必要だろう。ハイブリッドから完全オンライン化した場合にも円滑に移行できる方式を考える必要がある。

今夏の経験より、基本的なことになるけれども限られた期間内に多くのポスター（発表ファイルといった方がいいかもしれない）を見る時間を十分に確保する事が大会運営上一つ重要な点だと感じる。たとえコロナが収まっても今後の大会はハイブリッドがスタンダードになるかもしれない。従来の菌学会の対面発表は3会場に分かれて行われてきた。しかし、会場ごとに設備は異なり必ずしも全会場からはオンライン配信ができないことも想定される。今後の開催予定地でもオンライン発表と対面発表のバランスは気になるところであろう。そこで、もう一点重要だと考えた点は学生発表の優先である。審査が公平に行われるように、大会参加者全員が学生発表を聴講できるプログラム構成が必要だと考える。

コロナ禍によりこの3年間一度も現地開催発表の経験が無い学生も多いと思う。開催地での発表を経験し、開催地での討論に盛り上がっていただくのもよろしいかと感じている。以上いくつかの学会に参加し感じたことを記述した。

E-mail: hirokis@ffpri.affrc.go.jp（佐藤大樹）

The Hidden Kingdom of
Fungi: Exploring
the Microscopic World
in Our Forests,
Homes, and Bodies
(隠された菌類の王国：森・家・体に
潜むミクロの世界を探検する)
著：Keith Seifert
Greystone Books Ltd, Vancouver,
2022年5月24日, 296 pp. 定価 \$34.95
CAN (Amazon, ¥3,086, 2022/11/12)
ISBN: 978-1-77164-662-8 (cloth), ハード
カバー版



著者の Seifert 博士はカナダ農務省研究所で糸状菌類の研究を長年続け、現在は Carleton University の教授として、菌類の研究・教育・啓蒙活動を行っている。その間、系統分類学などに関する多くの研究成果を上げ、International Mycological Association の会長などを歴任した。本書は著者が述べている通り、菌類の知られざる世界と、人間や他の生物、そして私たちの環境との関わりを探る旅である。持続可能な未来を目指し、どのように私たちが菌類を利用し、また菌類が私たちを利用しているかを解説した啓蒙書である。彼の3人の姉たちに捧げられたこの本は菌類愛好家や初学者だけが「隠された菌

類の王国」について学ぶためだけのものではなく、大学教員や研究者がそれぞれの菌類についての理解を再確認し、また学部学生にとっては外書講読や科学英語の教材としても活用できる。

本書の構成概要は以下通りである： Rob Dunn 教授によるまえがき。著者による菌類の一般名・学名・分類階級に関する概説。執筆目的と菌類研究者になった個人的いきさつ・菌類の王国・菌類の環境世界 (Umwelt) に関する導入。中心をなす3部からなる本文。そして、謝辞、現在の菌類分類体系の概要を示した付録、項目ごとの著者の注釈、引用文献、および索引。

本文の第1部「隠された王国」では、菌類の進化、形態・培養株・DNAによる同定、菌類と植物との関係(植物寄生、地衣類における共生、歴史を変えた作物の疫病)、アリタケを栽培するハキリアリとの相利共生、トリコミケスの昆虫への片利共生などについて解説している。また、第2部「菌類の惑星」では、森林や樹木の内生菌と表在菌、菌根菌と根圏菌、樹木の風土病と *Grosmannia clavigera* などによる森林病害、木材腐朽と物質循環、菌根菌や内生菌などの農業利用、サビ菌と麦角菌、マイコトキシン、農業用生物防除、酵母やカビ(アオカビや麹菌)を用いた発酵食品・飲料や堆肥の生産、住環境の菌類とアレルギー、菌類によるヒトの病気、抗真菌薬などの広範な話題について述べている。さらに、第3部「菌糸体の革命」では、有機酸や酵素などの工業用マイコテクノロジー、医薬品探索、菌食とバイオ燃料、環境浄化、ビールやチーズなどの専門店型バイオテクノロジー、菌類素材の効率活用に関する将来展望、菌類と持続可能な地球、政策と規制(貿易と生物多様性のバランス)、科学研究と生物多様性条約を踏まえたコレクションの整備、市民科学(菌類との新しい関係)、ワンヘルス(持続可能な世界的ビジョン)などについて言及している。

著者が特に第3部で主張しているように、私たちが普段なかなか気づかない菌類の世界をよく理解することに努め、菌類からの地球や人間に対する恩恵を再認識し、さらに菌類などがもたらす将来の希望やその効率利用を目指して、バランスのとれた健全な生物間のコミュニティーや生態系を将来にわたって維持していきたい。また、個人的には、導入で書かれているオンタリオ州での幼少期の事が興味深かった。なお、読書の骨休めのために、図版がもう少し多くても良いのではないかとも感じた。糸状菌類の分類関係者の必携書である *The Genera of Hyphomycetes* (2011) の筆頭著者でもある Seifert 博士の菌類に関する博識に、本書を通じて多くの方に是非ふれていただきたいと思う次第である。

岡田 元 (理化学研究所 バイオリソース研究センター)
gokada@a.riken.jp

掲示板

日本菌学会第 67 回大会 (現地+オンラインによるハイブリッド開催)のご案内 (第二報)

服部 力
(日本菌学会第 67 回大会会長・
森林総合研究所)

日本菌学会第 67 回大会は、現地での対面式の開催に重点をおきながらオンライン参加も可能とする、ハイブリッド形式として予定しています。

本大会では、(1) 現地およびオンラインのいずれからも講演・質疑応答可能なハイブリッド講演(公開講演会、大会シンポジウムおよび学生優秀発表賞の審査対象講演)、(2) 現地から講演・質疑応答が可能で、講演動画のオンライン視聴可能(ライブ配信中での質疑応答は不可)な講演、(3) LINC Biz を通じて事前録画された動画の視聴およびチャットでの質疑応答が可能なオンデマンド講演の 3 様式で行います。また、プログラム編成の都合上、各種受付の延長はいたしませんので、期限をお守りくださいますよう、ご協力をお願い申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の全国的な感染拡大や、開催地である熊本市の感染リスクレベルなどの状況によっては、オンラインのみの開催へと切り替える可能性があります。大会開催形式については 4 月上旬を目処に最終判断をいたします。会員ならびに大会参加者の皆様には、メール、学会ホームページ、および大会ホームページを通じて、最新の情報をお知らせしていきます。

1. 開催形式・会場

(1) 開催形式

現地会場での対面、会場からの Zoom による配信、ならびに LINC Biz を併用したハイブリッド形式

(2) 会場

熊本県民交流会館パレア 10 階

〒 860-0808 熊本県熊本市中央区手取本町 8-9

TEL: 096-355-4300

2. 大会日程

2023 年 5 月 27 日(土)

受付

会員説明会

各賞授賞式・受賞講演

中高生発表

中高生発表表彰式

公開シンポジウム

2023 年 5 月 28 日(日)

一般講演

閉会式(大会会長挨拶・学生発表表彰式・

次回大会案内)

3. 各種申込み期限

今大会ではプログラム編成の都合上、申込み期間の延長はいたしませんので、期日までに手続きをお済ませください。

(1) 参加のみ

2023 年 1 月 15 日(日)～2023 年 5 月 15 日(月)

(3 月 1 日以降は割増し料金となります)

(2) 講演申込

2023 年 1 月 15 日(日)～2023 年 2 月 28 日(火)

(3) 講演要旨の提出

2023 年 1 月 15 日(日)～2023 年 2 月 28 日(火)

4. 参加申込み

大会への参加を希望される方は、参加費の支払いと、大会ホームページ上でご案内する所定の Google Forms に必要事項のご入力をお願いいたします。

(1) 一般講演資格

一般講演を希望される方は、講演申込み締切日までに 2023 年度分の年会費をお支払いください。

非会員の方で一般講演を希望される場合は、講演申込み締切日までに入会手続きをお済ませの上、2023 年度分の年会費をお支払いください。入会に関する問い合わせ先は、学会ホームページの「各種手続き」(<https://www.mycology-jp.org/html/admission.html>)をご確認ください。

(2) 参加費

参加費の支払いはオンラインチケット購入システム「Peatix」で行います。Peatix 利用には、E-mail アドレスによりアカウントを作成していただく必要があります。支払いはクレジットカード、PayPal、コンビニでの店頭払いや銀行 ATM での振込みが可能です。コンビニや銀行 ATM では手数料として別途 220 円が必要です。上記の支払い方法が利用できない場合は事務局へご相談ください。

なお、完全オンライン開催に変更となった場合は、上記参加費から会場キャンセル料など諸経費を差し引いた金額を大会終了後に精算し、返金させていただく可能性があります。予めご了承ください。

会員の種別と大会参加費

| 種別 | 大会参加費 | |
|----------|--------------|-------------|
| | 2023/2/28 まで | 2023/3/1 以降 |
| 正会員・終身会員 | 8,000 円 | 9,000 円 |
| 学生会員 | 4,000 円 | 5,000 円 |
| 非会員 | 9,000 円 | 10,000 円 |

5. 講演要旨の登録・講演要旨集の入手

講演要旨は、期日（2023年2月28日）までに、参加費支払い後に大会事務局からメールでご案内する「講演者用ページ」から、Wordファイルのアップロードにより登録してください。

(1) 講演資格

一般講演は会員に限り、また原則として1名1題としますが、共同発表者としての講演数には制限はありません。非会員の方で一般講演を希望される方は、参加申込前に日本菌学会への入会手続きを行ってください。なお、賛助会員として参加ご登録の方は一般講演できませんので、ご了承ください。

(2) 講演要旨の提出

講演要旨は、参加費のお支払い、および参加・講演申込み完了後にご案内する「講演者用ページ」に、雛形のWordファイルを準備しますので、必要項目を入力後にアップロードしていただき提出となります。

(3) 制限事項・免責

サーバ環境には万全を期しておりますが、不測の事態により登録データが消失した場合、電子メールまたは本学会ホームページ上にてお知らせの上、再登録を行っていただく場合がございます。

日本菌学会は特許法第30条（発明の新規喪失の例外）に基づき特許庁長官が指定している学術団体であり、発表から少なくとも6ヶ月の間は「その技術思想」を本人のものとして申請する権利を保持することができますが、発明の新規性喪失の例外規定の適用を受けるための諸手続は、発表者ご自身の責任において行ってください。

(4) 講演要旨集の入手

PDF形式の講演要旨集を大会ホームページからダウンロードいただけます。冊子体をご希望の方は、「大会参加者用ページ」から事前申し込みのうえ、有料（価格未定）にてお渡します。

会場では、プログラムのみ掲載した簡易版を無料配布する予定です。簡易版は大会ホームページからもダウンロードできるようにします。

(5) 講演要旨集のみ入手ご希望の方

大会参加はせず、冊子体の講演要旨集のみをご希望の方は、大会事務局までご相談ください。冊子体の購入者に限り、ご要望に応じてPDF版もお渡します。

(6) 名誉会員、賛助会員の方

後日、招待状と冊子体の講演要旨集をお送りいたします。本大会への参加を希望される方は、招待状の返信またはメールにて大会事務局までお申込みください。

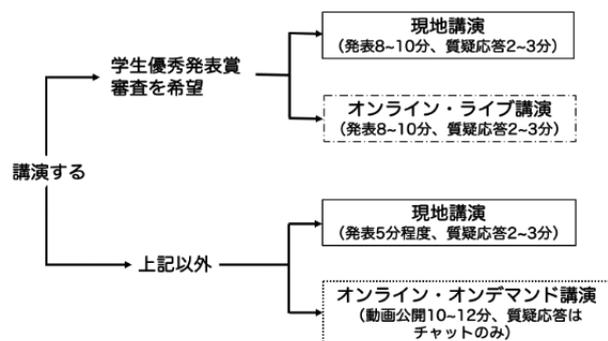
6. 講演形式

新型コロナウイルス感染症再拡大に伴い、完全オンライン開催となることも想定し、一般講演は発表スライドに説明を録音したMP4動画ファイルを、大会開催日までにLINC Bizプラットフォーム上にアップロードしていただきます。発表ファイルは開催5日前の2023年5月21日（日）までに公開し、LINC Bizのチャット欄から質疑応答を可能とします。公開は6月3日（土）までとします。大会の事前・事後の活発な議論の場として積極にご活用ください。

本大会の一般講演では、コロナ禍により学会での登壇発表の機会を失った学生を優先いたします。一般講演申込者は参加申込み時のGoogle Formsで、現地もしくはオンラインで講演するかを選択してください。申込み期間内の変更は可能としますが、以降は変更できませんのでご注意ください。

学生優秀発表賞の審査対象の講演は、現地およびオンラインのいずれからも講演・質疑応答可能なハイブリッド形式で行います。希望される方は、Google Formsで「審査を希望する」を選択してください。現地講演、オンライン・ライブ講演のどちらも講演時間は8～10分、質疑応答は2～3分を想定しています。講演はライブ配信され、質疑応答は現地、オンラインの双方向で可能です（図）。

それ以外の方は、Google Formsで「現地参加」、「オンライン参加」いずれかを選び、さらに現地での講演希望者は「現地講演」、LINC Bizでの「オンライン・オンデマンド講演」のいずれかを選んでください。審査対象講演以外の「オンライン参加」による講演は、LINC Bizでのオンライン・オンデマンド講演のみとなります。現地



図．講演形式を選択するまでのながれ

講演の発表時間は5分程度、質疑応答は2～3分を想定しています。持ち時間は、講演数に応じて変更する可能性があります。オンデマンド講演は動画上映を10～12分とし、質疑応答はLINC Bizでのチャットのみとします(図)。

なお、講演時間は発表者数に応じて変更しますのでご承知おきください。最終決定はプログラム編成後の4月中とし、大会ホームページやメールを通じてお知らせします。

7. 中高生発表

中高生発表参加者を募集します。参加申込および講演演題名・要旨登録は、一般講演登録に準じて大会ホームページから行ってください。講演する中高生および引率者(1題あたり1人)の学会入会・大会参加費は不要です。

講演は、発表スライドに説明を録音したMP4動画ファイルを、大会開催日までにLINC Bizプラットフォーム上にアップロードしていただきます。発表ファイルは開催5日前の2023年5月21日(日)までに公開し、LINC Bizのチャット欄から質疑応答を可能とします。公開は6月3日(土)までとします。

詳しい講演形式はメールや大会ホームページ上でお知らせします。今回は現地会場でのポスターによる講演は行いませんのでご注意ください。

中高生発表の募集につきましては、会員からもご周知くださいますようお願い申し上げます。

8. 自由集会の募集

本大会では、現地大会開催前にオンライン・リアルタイム形式による自由集会を募集します。応募締切りは、2023年3月31日とし、応募は大会事務局までメールによりテーマ、内容、企画者等の情報を付してご連絡ください。ご応募いただいた企画内容について大会実行委員会で審議し、決定いたします。自由集会の内容は、大会ホームページやメールにて詳細を告知いたします。

自由集会に用いるZoom等のビデオ会議アカウントや世話役等は主催者側でご準備ください。主催者は日本菌学会会員に限ります。

9. 大会実行委員会

大会会長：服部 力(森林総合研究所)

事務局長：木下晃彦(森林総合研究所九州支所)

実行委員：秋庭満輝(森林総合研究所)

石原 誠(森林総合研究所九州支所)

安藤裕萌(森林総合研究所九州支所)

糟谷大河(慶応義塾大学生物学教室)

金子周平(熊本きのこ会)

三枝敬明(崇城大学生物生命学部)

佐藤大樹(森林総合研究所)

高畑義啓(森林総合研究所北海道支所)

辻田有紀(佐賀大学農学部)

中村圭子(熊本県林業研究・研修センター)

中村慎崇(森林総合研究所九州支所)

大会事務局：

森林総合研究所九州支所 木下晃彦

〒860-0862 熊本県熊本市中央区黒髪4-11-16

E-mail: msjmeeting67@fungi.skr.jp

16 から 18 ページは『会員限定記事（印刷版限定）』

日本菌学会ニュースレターは年4号発行され、学会会員と賛助会員まで送付されます。発行部数は1,300部です。また、常時投稿記事を募集しております。ご意見、ご不明の点などございましたら下記の編集委員までご連絡下さい。

日本菌学会ニュースレター編集委員長(2021-2022年度)
広瀬 大 日本大学薬学部
hirose.dai@nihon-u.ac.jp

同編集委員

井本敏和 菌類懇話会

kusabira@mist.ocn.ne.jp

牛島秀爾 日本きのこセンター菌茸研究所

kin-ushis@infosakyu.ne.jp

北出雄生 森林総合研究所九州支所

y.kitade3335@gmail.com

升本 宙 京都大学大学院地球環境学堂

masumoto.fungi@gmail.com

三輪恵実 (株) テクノスルガ・ラボ

e.miwa0823@gmail.com

一般社団法人日本菌学会会長 (2021-2022年度)

細矢 剛 (国立科学博物館)

〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1

副会長

矢口貴志 (千葉大学)

理事

岡根 泉 (庶務担当; 筑波大学)

折原貴道 (日本菌学会会報編集責任者; 神奈川県立生命の星・地球博物館)

糟谷大河 (国内集会担当; 慶應義塾大学)

田中栄爾 (広報・企画・教育・普及担当; 石川県立大学)

谷口雅仁 (国内集会担当; 菌類懇話会)

玉井 裕 (編集委員長; 北海道大学)

出川洋介 (広報・企画・教育・普及担当; 筑波大学)

服部 力 (会計担当; 森林総合研究所)

廣岡裕吏 (国際集会担当; 法政大学)

保坂健太郎 (庶務担当; 国立科学博物館)

日本菌学会ホームページ

<http://www.mycology-jp.org/>

速報性の必要なイベント情報の掲載などは学会ホームページ担当 (secretary-general@mycology-jp.org) までお問い合わせ下さい。その他、学会運営等に関しては、上記まで適宜お問い合わせ下さい。

日本菌学会では、随時、会員を募集しております。広い意味での菌類 (地衣、粘菌なども含む) に興味をお持ちの研究者ならびに愛好家の方など、どなたでもご入会いただけます。学会への入会方法は、ホームページをご覧ください。また、賛助会員についても募集しております。

ここ数年で「Sustainable Development Goals (SDGs)」という言葉を目にする機会が急に増えました。SDGsは限りある資源の浪費をやめ、環境にやさしい未来を目指していこうとする考え方が基礎にあります。そんな中で、菌類に関連した面白い製品を目にすることがあります。例えば、土屋鞆製造所や Ear Micro といった企業ではきのこの菌糸体由来のレザー代替素材を活用した様々な製品を販売しています。革製品にカビが発生してしまったなんて話はよく聞きますが、革の代わりに利用できるなんて、と驚きました。短期間で成長し再生可能である点や生分解性で環境負荷が低いという点からも注目されているとのこと。最近各地の博物館などできのこ展が開催されるなど、食品としてだけでなく、その生態にフォーカスされることが増えているなど思っていたのですが、時代の流れによって社会との関わり方もどんどん多様になっていくのを感じます。

代替資源はまだ発展途上な分野ではありますが、環境問題への危機意識などから、このような製品が増え、今後は実際に手に取れる機会が増えるかもしれません。興味のある方はチェックしてみてもいいでしょうか。

(編集委員 三輪恵実)

年末年始に熱いスポーツの一つにラグビーが挙げられます。昨年娘が小学校入学とともにラグビーを始めたこともあり、我が家ではラグビーブーム真っ只中、年末年始も勿論熱い時間を過ごしました。ラグビーは激しいコンタクトプレーがあることから男のスポーツのイメージが強いかもしれませんが、最近女子ラグビーも盛り上がりを見せています。昨年ラグビー王国ニュージーランドでワールドカップが開催され、日本代表サクラジャパンにとっては厳しい結果だったものの、ワールドカップ前には強豪のオーストラリアやアイルランドに勝利を収めるなど着実に力をつけているようです。注目されはじめると競技人口が増すと思われませんが現状では多くチームで小学生ラグビーは男子10人に1人いるかないかくらいの割合しかいないようにみえます。しかし、大会では男子に混ざって活躍しているラグビーをよくみます。彼女達の姿をみると世界中のラグビーに携わる人が大切にしている「品位、情熱、結束、規律、尊重」という5つのコアバリューの凄さを感じずにはられません。因みにこのコアバリューに基づくコーチングは薬学部の微生物学においてマイナーな存在である菌類を扱う研究教育を遂行する上で大変参考になっています。「ラグビーは子どもをいち早く大人にし、大人に永遠の子どもの魂を抱かせる」。これは元フランス代表のジャン・ピエール・リーブが発した有名な言葉です。今年もラグビーの様に遅くそして楽しく研究を進めたいと思います。

(編集委員長 広瀬大)

Volume 63, Issue 5 (2022)

Available online at: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/mycosci/-char/ja>

Contents

- FP** *Pyrenopeziza orientalipectiolaris* sp. nov. in Japan and morphological and genetic comparison with its relevant species *P. petiolaris* in Europe
Hiyori Itagaki, Tsuyoshi Hosoya 181–188
- FP** The study of early screening technique for fruiting ability of *Lentinula edodes* hybrid progenies
Yu Li, Hailong Yu, Liangmin Li, Chunyan Song, Xiaodong Shang, Qi Tan, Lujun 189–196
Zhang, Qiaozhen Li
- FP** New findings on the fungal species *Tricholoma matsutake* from Ukraine, and revision of its taxonomy and biogeography based on multilocus phylogenetic analyses
Wataru Aoki, Niclas Bergius, Serhii Kozlan, Fuminori Fukuzawa, Hitomi Okuda, 197–214
Hitoshi Murata, Takahide A. Ishida, Lu-Min Vaario, Hisayasu Kobayashi,
Erbil Kalmış, Toshimitsu Fukiharu, Seiki Gisusi, Ken-ichi Matsushima,
Yoshie Terashima, Maki Narimatsu, Norihisa Matsushita, Kang-Hyeon Ka,
Fuqiang Yu, Takashi Yamanaka, Masaki Fukuda, Akiyoshi Yamada
- SC** *Micropsalliota pileocystidiata* (Agaricaceae), a new species from Maharashtra, India
Prashant B Patil, Sharda Vaidya, Satish Maurya, Nitinkumar P Patil 215–221
- SC** Phylogeny and taxonomy of *Erysiphe berberidis* (s. lat.) revisited
Li Liu, Michael Bradshaw, Uwe Braun, Monika Götz, Seyed Akbar Khodaparast, 222–234
Tie-zhi Liu, Timur S. Bulgakov, Hamideh Darsaraei, Wolfgang Karl Hofbauer,
Yu Li, Shu-yan Liu
- SC** *Puccinia caricis-smilacis*, a new caricicolous rust fungus producing spermogonial and aecial stages on *Smilax china* in Japan
Taiga Kasuya, Kentaro Hosaka, Makoto Kakishima 235–241

RV Review

FP Full Paper

SC Short Communication

N Note

Volume 63, Issue 6 (2022)

Available online at: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/mycosci/-char/ja>

Contents

- RV** Cultivation studies of edible ectomycorrhizal mushrooms: successful establishment of ectomycorrhizal associations in vitro and efficient production of fruiting bodies
Akiyoshi Yamada 142–148
- FP** Taxonomy and phylogeny of *Exobasidium pentasporium* causing witches' broom of *Rhododendron* species
Saho Shibata, Yuuri Hirooka 149–155
- FP** *Lentinula ixodes* comb. nov. (Omphalotaceae, Agaricales) including new records in Brazil
Jadson J. S. Oliveira, Tiara S. Cabral, Ruby Vargas-Isla, José F. B. Silva, 156–164
Doriane P. Rodrigues, Nelson Menolli Jr., Mariana P. Drewinski,
Noemia K. Ishikawa
- FP** Mushroom poisoning in Thailand between 2003 and 2017
Sayanh Somrithipol, Umpawa Pinruan, Sujinda Sommai, Phongsawat 165–168
Khamsuntorn, Janet Jennifer Luangsa-ard
- FP** *Morchella nipponensis* sp. nov. (Ascomycota, Pezizales): a paleoendemic species of section *Morchella* discovered in Japan
Philippe Clowez, Takumi Izumi, Paul-Bill Lamiable, Koichi Shibakusa, Camelia 169–175
Minculeasa, Pablo Alvarado
- FP** Novel acid trehalase belonging to glycoside hydrolase family 37 from *Pleurotus* sp.: cloning, expression and characterization
Gaku Tsutsumi, Chikako Kuroki, Kengo Kamei, Mizuho Kusuda, 176–180
Masami Nakazawa, Tatsuji Sakamoto, Mariko Ishikawa, Shinji Harada,
Hitoshi Kobayashi, Kenji Ouchi, Satoshi Inatomi, Minoru Sakaguchi,
Takeo Iwamoto, Mitsuhiro Ueda
- SC** A new edible species of *Gomphus* (Gomphaceae) from southwestern China
Jian-Wei Liu, Thatsanee Luangharn, Shan-ping Wan, Ran Wang, Fu-Qiang Yu 176–180

RV Review

FP Full Paper

SC Short Communication

N Note

日本菌学会賛助会員

(株) 秋山種菌研究所

〒 400-0042 甲府市高畑 1-5-13
Tel 055-226-2331 Fax 055-226-2332

(株) キノックス

〒 989-3126 仙台市青葉区落合 1-13-33
Tel 022-392-2551 Fax 022-392-2556

合同酒精(株) 酵素医薬品研究所

〒 271-0064 松戸市上本郷字仲原 250
Tel 047-362-1158 Fax 047-364-6466

第一三共 RD ノバーレ (株)

創薬基盤研究部天然物 G

〒 134-8636 江戸川区北葛西 1-16-13
Tel 03-5696-8301 Fax 03-5696-8302

(株) 千曲化成

〒 389-0802 千曲市内川 1101
Tel 026-276-3355 Fax 026-276-6182

(一財) 日本きのこ研究所

〒 376-0051 桐生市平井町 8-1
Tel 0277-22-8165 Fax 0277-46-0906

(株) 富士種菌

〒 400-0226 南アルプス市有野 499-1
Tel 055-285-3111 Fax 055-285-3114

ホクト (株)

〒 381-0008 長野市大字下駒沢 800-8
Tel 026-296-3211 Fax 026-296-1465

(株) 北研

〒 321-0222 栃木県下都賀郡壬生町駅東町 7-3
Tel 0282-82-1100 Fax 0282-82-1119

三菱ケミカル (株)

Science & Innovation Center

〒 227-8502 横浜市青葉区鴨志田町 1000 番地
Tel 045-963-3601 Fax 045-963-3976

森産業 (株) 研究開発部

〒 376-0051 桐生市平井町 8-1
Tel 0277-22-8168 Fax 0277-40-1557

(株) 雪国まいたけ 研究開発室

〒 949-6695 南魚沼市余川 89
Tel 025-778-0153 Fax 025-778-1282

(2022 年 12 月現在)

日本菌学会ニュースレター投稿票

メール本文または添付ファイルにて投稿票をお送り下さい。

題名：

投稿者名：

連絡先：〒

電話：

電子メール：

投稿区分（○で囲んで下さい）：資料 研究レポート 報告 紹介 随想 解説 書評 表紙写真（イラストも含む）
その他（ ）

その他、要望等：

※ご投稿いただいた記事は原則として、クリエイティブ・コモンズ表示・非営利（CC BY-NC 4.0）の条件下で掲載されます。ただし、著者全員の合意があれば、表示・非営利・改変禁止（CC BY-NC-ND 4.0）も選択できます。表示・非営利・改変禁止をご希望される場合は「その他、要望等」欄にその旨をご記入ください。

日本菌学会ニュースレター 2023 年 1 号

令和 5 年（2023 年）1 月 1 日

編集者 広瀬 大

発行人 細矢 剛

印刷所 勝美印刷株式会社

〒 113-0001 東京都文京区白山 1-13-7

アクア白山ビル 5 階

Tel. 03-3812-5201（代表）

発行所 一般社団法人 日本菌学会

〒 113-0001 東京都文京区白山 1-13-7

アクア白山ビル 5 階